

MIE UNIVERSITY NEWSLETTER

1994. 12. 27

ウェーブ三重大

3

号



三重大学広報委員会



表紙タイトル 『 街 』



表紙デザイナープロフィール

宮田 修平

教育学部教授（芸術学士）

1933年生

Profile of cover designer

Syuhei MIYATA

Professor, Faculty of Education

(Bachelor of Arts)

Born in 1933

Photo: Tsutomu NAKAMURA

目 次

Contents

1. 第1回アジア太平洋骨軟部腫瘍会議評議会を開催して 1
The First Meeting of Asia-Pacific Musculoskeletal Tumor Society
荻原義郎 1
Yoshio OGIHARA
2. 3大学国際ジョイントセミナー1994 3
世界の中のアジアの役割——人口・食糧・エネルギー・環境——
The Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1994
Role of Asia in the World
——Population, Food, Energy & Environment——
加藤征三 3
Seizo KATO
3. 三重大学シーフードリサーチ国際集会 5
——環太平洋地域におけるシーフードリサーチ——
The International Seafood Research Meeting of Mie University
——Seafood Research in the Pan-Pacific Area——
丹羽榮二 5
Eiji NIWA
4. 平成6年度日本水産学会秋季大会 7
The Autumn Meeting of the Japanese Society of Fisheries
Science 1994
野田宏行 7
Hiroyuki NODA
5. 三重大学の外国人研究者 9
Reports by Mie University Overseas Researchers
周 平 9
Zhon PING
6. 留学生の目 10
Foreign Student's Viewpoint
サディク・タベジャマート 10
Sadegh TABEJAMAAT
7. 第47回日本衛生動物学会大会——第24回日本医学会総会分科会—— 11
47th Annual Meeting of Japanese Society of Medical Zoology
——Satellite Meeting of 24th Japanese Society of Medicine——
8. 第2回インターネットによる国際会議—バイオメディカルサイエンス— 11
The Internet Congress ——Biomedical Science——
9. 三重大学概要 12
Outline of Mie University

英文は日本語の要約です。

The English is a condensed version of the Japanese.

第1回アジア太平洋骨軟部腫瘍会議評議会を開催して The First Meeting of Asia-Pacific Musculoskeletal Tumor Society

骨肉腫に代表される骨軟部腫瘍は、かつてその予後がきわめて不良とされ、外科的治療も罹患四肢切断という、患者にとってまさに絶望的な疾患であった。ところが、80年代から化学療法が飛躍的な進歩を遂げ、患肢温存手術によっても良好な生存率が得られるようになった。こ

れが患者にとって大きな福音となったことはいままでのないが、腫瘍切除後の組織欠損をいかに再建するか、どれくらい機能を残せるかなど、今後解決すべき問題も少なくない。

こうした世界的な潮流の中、昨年シンガポールにおいて「国際患肢温存会議」が開かれた。各国の研究者らが一堂に会し、これらの問題について基礎から臨床にわたり幅広く研究成果の情報交換を行った。この席でアジアにおける患肢温存手術の普及と発展の必要性が論じられ、日本を第一回開催国としてアジア太平洋骨軟部腫瘍会議の発足が決定された。主催するのはわれわれ三重大学整形外科教室である。

そのための足掛かりとして平成6年7月20日、当教室が毎年主催している伊勢志摩骨軟部腫瘍夏季セミナーに

It is a great honor for Mie University as well as the Dept. of Orthopaedic Surgery to sponsor the First Asia-Pacific Musculoskeletal Tumor Society Symposium that will be held on July 13th 1995 in Japan.



各国代表者と荻原教授
Representatives and Prof. Ogihara

The first meeting for the Society was held in Nemu-no-sato on July 20th, 1994. Ten representatives gathered from Korea, Singapore, Australia, and Japan. They actively discussed about how to carry out the First Asia-Pacific Musculoskeletal Tumor Society Symposium and enjoyed luncheon cruise.

After the conference, the 5th Summer Seminar Musculoskeletal Tumor in Ise Shima was also held in Nemu-no-sato, where five guest lectures were given by world-famous researchers.



評議会にて
At the meeting

併せて第一回の評議委員会が合歓の郷で開催された。議題は本会議の場所と期日、各国の代表者、運営方針などで、参加者は以下のとおりとなった。

- 萩原 義郎 (三重大学・教授)
 : 第1回アジア太平洋骨軟部腫瘍会議会長
 Robert W.H. Pho
 (シンガポール・シンガポール大学教授)
 Francis W. Marsden
 (オーストラリア・クイーンズランド大学教授)
 Yong W. Bahk (韓国・カトリック大学教授)
 赤松 功也 (山梨医大教授)
 内田 淳正 (大阪大学講師)
 琴浦 良彦 (京都大学助教授)
 柴田 大法 (愛媛大学教授)
 富田 勝郎 (金沢大学教授)
 山室 隆夫 (京都大学名誉教授)



萩原義郎会長の挨拶
 Presidential address by Dr. Y. Ogihara

評議委員会は、合歓の郷にあるマリーナから全員が大型クルーザーに乗船し、クルージングとランチを楽しみながら行われた。天候にも恵まれ、伊勢志摩を代表するリゾート地でなごやかに始まった評議委員会も、議事が進につれて活発な討論が展開された。1時間余りの論議の末、第一回骨軟部腫瘍会議を平成7年7月13日、東京のホテル京王プラザで行うこと、来年の開催に向けてさらにアジア各国代表者を募ることなどアジア太平洋骨軟部腫瘍会議を実りあるものにしていくための組織作りがほぼ固まった。



会場風景
 The Scenery of discussion in the assembly hall

評議委員会に続いて午後からは、同じ合歓の郷で当教室が毎年主催する第5回伊勢志摩骨軟部腫瘍夏季セ

ミナーが行われた。米国のメイヨクリニックからSim教授、前述のMarsden教授、米国ロサンゼルス整形外科病院のMirra教授、同じくセダーズサイナイ癌センターのForscher博士、スウェーデンはカロリンスカ病院からKreicbergs助教授を迎えてまさに世界的レベルの講演となった。

国内外からの約150名の参加者は、リゾート地での開催という異例のセミナーに一種の戸惑いを見せながらも、例年のない酷暑の1日を有意義に過ごしていた。



筆者プロフィール
萩原 義郎
 医学部教授 (医学博士)
 1937年生

Profile
Yoshio OGIHARA
 Professor, Faculty of Medicine
 (Doctor of Medicine)
 Born in 1937

3大学国際ジョイントセミナー1994

世界の中のアジアの役割

—人口・食糧・エネルギー・環境—

The Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1994

Role of Asia in the World

—Population, Food, Energy & Environment—

三重大学と学術交流協定を結んでいるアジアの江蘇理工大学（中国）とチェンマイ大学（タイ）との3大学間で、「親善的な交流を、さらに研究教育上の実質的な意味を持たせよう」との気運が高まり、2年程の準備を経て、今回の開催にこぎつけることができた。

まず、テーマに関しては、「21世紀はアジアの時代」との認識から「世界の中のアジアの役割」をアジアで深刻な問題となりつつある「人口・食糧・エネルギー・環境」の切り口から考えてみようとの共通認識が生まれた。また、三重大学を会場として、秋たけなわの10月11日～14日に開催することになった。

会議の運営方法として、まず、21世紀を担う学生達の参加こそが21世紀を先取りするテーマの大会の成功に不可欠との認識になった。そして、参加学生には「世界の中のアジアの役割—人口・食糧・エネルギー・環境—」に関連する具体的なテーマについての調査、まとめ、レポート、発表を義務付け、「セミナー」として全体会議の場で各発表に対する議論を高めていくことにした。同時に、「人口・食糧・エネルギー・環境」に関する学術的な研究発表の場も重要であるとの認識も強く、これには「シンポジウム」という形式で応えることになった。シンポジウムでの発表も若い助手や大学院生あるいは留学生にお願いし、一般の学生にも分かる発表を心がけていただくことにした。ベテランの先生方には基調講演と司会をお願いし、若い参加者に今後の勉学と研究の参考と刺激を提供いただくことにした。発表はすべて英語で行うことは当然の認識であった。

セミナーとシンポジウムは午前、昼食は学生食堂で、午後は見学など実際の現場での実地研修とした。8月末にはプロシーディングの原稿が締め切れ、プログラムの設定やポスター図案が決定、それぞれ印刷にまわされた。大会直前には看板や参加者名札などすべての準備が整った。

さて、10月8日に江蘇理工大学グループが名古屋空港に、9日にチェンマイ大学グループが関西新空港にそれぞれ到着し、実質的に大会が開始された。10日は津まつりを楽しんだ後、キャンパスで三重大学の学生達が準備

The three universities of Cheng Mai Univ.(CMU), Jiangsu Univ. of Sci. & Tech. (JUST) and Mie Univ. (MU) in Asia held firstly the Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1994 in October 11-14, 1994, at the Faculties of Engineering and Biore-

sources, Mie University, in order to promote more educational and academic relationships of the general agreement. The topic item entitled "Role of Asia in the World—Population, Food, Energy & Environment—

was selected, because it is all important for the sustainable, harmonic development and the survival of human beings. Especially Agriculture and Technology are the keys elements playing an essential role for more improved situation leading to the 21st century. This timely conference provided a good opportunity for the three



「3大学国際ジョイントセミナー1994」のポスター
Poster of the Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1994



日本の歌にダンスを興ずる参加者
Mie Univ. Delegate singing a Japanese song and dancing couples

してくれたバーベキューパーティーで草の根の国際交流が始まった。中国の学生達の餃子パーティーも好評であった。

11日9時、生物資源学部の206番教室で武村学長の歓迎スピーチから「セミナーI -人口・食糧-」が開始された。午後は地域共同研究センター・遺伝子実験施設・図書館・病院の大学施設の見学会が行われた。また、午後6時から学長主催の歓迎パーティーがあさあけ会館で開催された。12日は工学部大会議室で澤工学部長の歓迎挨拶から「シンポジウムI -エネルギー・動力-」が始まり、午後は工学部のエネルギーと環境関連の研究室見学および日本鋼管㈱で30万トンのV L C Cと技術研究所の見学を行い、サティールにも立ち寄った。夜は工学部長招待のパーティーが開かれた。13日は再び生物資源学部で高橋学部長の挨拶と「セミナーII -エネルギー・環境-」が行われ、午後は生物資源学部の研究室および附属農場の見学会が実施された。夜は生物資源学部長招待の送別パーティーが開催された。14日は工学部で「シンポジウムII -エネルギー・環境-」があり、引き続き修了式が催され、参加者に修了証書が授与された。

10件の基調講演と22件の一般講演がなされたが、特に学生達による自国の調査結果の発表には注目が集まり、多くの質疑応答で常に時間が遅れる嬉しい悩みを体験した。また、3大学の学生達の交流には目を見張るものがあった。

何よりの成果は、この大会を来年はチェンマイ大学で、再来年は江蘇理工大学で今後も継続していく同意がなされ、

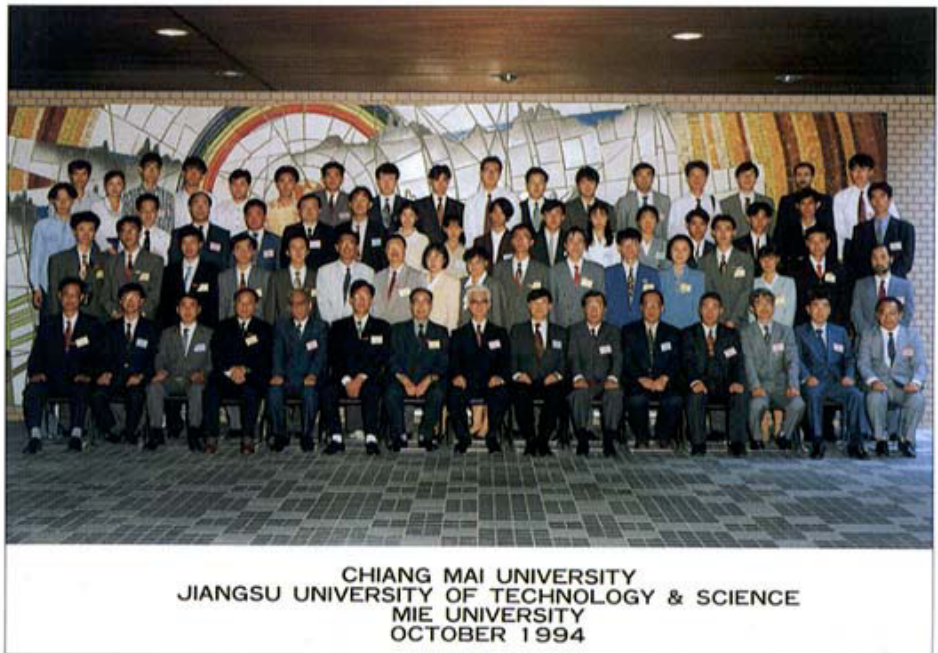
両大学間で交流協定が締結される運びとなったことである。また、カラオケで肩を叩きあい涙で別れを惜しんだ多くの学生達の姿も忘れられない。

江蘇理工大学とチェンマイ大学から各10名の学生と14名の教官を招待して本大会が成功裡に終えることができたのは三重大学国際交流委員会と日本国際教育協会の財政的なご援助と、武村学長をはじめ工学部と生物資源学部の先生方と事務方の絶大なご協力の賜物であり、心から感謝を申し上げたい。最後に、こうした国際交流セミナーに単位互換が認められることを祈念する次第である。

Asian university members to discuss common topics and to promote mutual understanding in preparing countermeasures for the forthcoming era.

Selected twenty students and fourteen faculty members from CMU and JUST were invited and shared all their times with the MU's participants in covering the gap between the way of thinking due to the different cultural background of our own. Surely this conference could be one of the steps to encourage all of us to think about the common items in global scale and to act locally in their own parts.

We, the representatives of the three universities, are also very pleased with the mutual agreement that the 2nd and the 3rd of this Tri-University International Joint Seminar & Symposium will be held at Cheng Mai and at Zhenjiang, respectively.



大会記念写真
Memorial photo



筆者プロフィール

加藤 征三

工学部教授 (工学博士)

1943年生

Profile

Seizo KATO

Professor, Faculty of Engineering

(Doctor of Engineering)

Born in 1943

三重大学シーフードリサーチ国際集会

—環太平洋地域におけるシーフードリサーチ—

The International Seafood Research Meeting of Mie University

—Seafood Research in the Pan-Pacific Area—

本誌前号で予告したように、本研究集会は平成6年9月30日、津市内プラザ洞津で開かれた。その数日前、台風26号が発生したという情報が入り、関係者はやきもきしたが、案じたとおり、その前日の29日に行われた招待講演者のエキスカージョンは散々であった。香良州のマリンフーズKKを見学後、伊勢路を南下し、パールアイランドで伊勢の午後を楽しみ、夕刻市内料亭茂波で歓迎会を開くというのが最初の予定であったが、どうも台風はこちらに向かっていくらしいというので、当日朝急遽予定を変更し、マリンフーズKKを見学後、夕刻の歓迎会を昼に繰上げた。午後2時頃まで台風の進路を気にしながらの歓迎会であった。午後3時を過ぎると急に風が強まり、商店街のシャッターがつぎつぎに下ろされ、事業所を早退する人も出始めた。台風が最高潮に達したのは夜10時頃で、このとき三重と和歌山の県境を北上したことを知ったのは夜半のことである。明けて30日、前日とは違って変わった秋晴れである。NKKドックで儀装中の30余万トンのタンカー2隻が流れ出し、香良洲海岸の砂浜に乗り上げたとき会場に着いた途端に聞かされた。この件はテレビや新聞の報道もあって、全国的な話題を呼んだ。仲良く並んで座礁した2隻の巨大タンカーを見るために、関東、関西からも大勢の人が連日押し寄せ、その数は1日6万人を越えたと言われる。

会場はほぼ満席で、プログラムにしたがって研究集会が始められたのは、定刻を10分過ぎていた。開会の辞を引き受けた筆者には、最前列に陣取った外国人招待講演者諸氏の姿がやたらにでかく見え、膝がガクガクして困ったものである。しかし、その後の講演は順調に進んだ。

かつての日本が歩んだように、豪、タイ、台湾においても原料としての魚介類は旧くは沿岸ものに頼ってきたが、次第に

This meeting was held in Plaza-Dohshin in Tsu city on Sept. 30, 1994. The followings were the content reported by nine speakers.



マリンフーズ見学の1コマ
A tour of Marine Food Co.Ltd

In Australia, Taiwan, and Thailand, aquaculture production is gaining in importance now, although coastal and far water fisheries were prosperous in former times. In Bangladesh, however, inland fisheries dominate over marine fisheries in respect of both catchment area and catch size. The transport of living animals has been eagerly developed also in Australia, and succeeded on lobster. The amount of value added products has been increased in many

countries, for example, Katsuobushi in Australia, surimi and its products in the United State, Thailand, and Southeast Asia, mince block and fish ball in Bangladesh, and fish sauce in Thailand. On the other hand, not only such the applied techniques but also many basic researches were reported. It was found that inorganic ions played some role in the taste of



会場風景 I
The scenery of discussion in the assembly hall

遠洋ものが増え、さらに最近では沿岸や淡水域での養殖ものの比重を高めつつある。しかし、バングラデシュのように、海産ものより淡水産ものが好まれ、かつ漁獲量が多い国もある。日本や台湾と同様に、豪も活魚輸送の技術開発に熱心にとりくみ、エビ類については既に成功し、現在カニや魚に挑んでいる。また、豪におけるカツオブシ、米、タイ、東南アジア地域におけるすり身、粉砕魚肉とそれらの加工品、バングラデシュにおけるミンチブロック、フィッシュバーガー、フィッシュボール、タイにおける魚醤油のように、付加価値の向上を目指した加工技術の開発も盛んである。さらに、現在廃棄されたり、未利用の水産資源についても、有効利用のための技術開発を進めつつある。一方、こうした技術研究だけでなく、生化学的あるいは微生物学的な基礎研究も着実に増えている。魚介類の旨味に対してアミノ酸、核酸関連物質に加えて、無機イオンが重要な役割を果たすことが明らかにされた。さらに、魚肉の加工特性における種特異性は、そこに含まれるミオシン分子の特定部位の1次構造の相違に由来することがバイオテクノロジー的手法の導入により確かめられつつある。最後に、品質管理や公衆衛生管理面の向上に加えて、飼料添加物などに対する安全性の国際的綱領の検討も重要である。

以上が招待講演者の講演の内容であるが、いずれも判り易くまとめられていた。内情を明かせば講演者に対する礼儀上、講演1題当たり少なくとも2つの質問をとるので、サクらの手配りまでしていたが、その心配もどうやら無用であったらしい。そのお陰もあってか、野田教授による閉会の辞が終わったのは定刻を30分以上越えていた。

森下教授の乾杯の音頭でたけなわとなった懇親会には、大学院生や夫人同伴の出席者の姿も見られ、和やかな雰囲気包まれた。「タンカーまでがドックを出て私達を歓迎してくれて、よしみやげ話ができました」とか「カニ足蒲鉾とカラオケは日本人の偉大な発明だ」という外国人講演者のスピーチまで飛び出して、会場に爆笑を誘った。最後に上野教授の挨拶でお開きとなったが、誰もがしばらく会場に留まり、互に別れを惜しみ合っていた。

本研究集会は三重大学交流基金によったものであり、ここに感謝致します。



会場風景 2
The scenery of discussion in the assembly hall

fish in addition to amino acids and nucleic acids related compounds. Furthermore, it has been certified that the species-specificity of gel-formability of fish is caused by the difference in the primary structure of myosin molecule contained in each fish.



講演会終了後
A souvenir picture after lecture meeting



筆者プロフィール

丹羽 榮二

生物資源学部教授 (農学博士)

1937年生

Profile

Eiji NIWA

Professor, Faculty of Bioresources

(Doctor of Agriculture)

Born in 1937

平成6年度日本水産学会秋季大会

The Autumn Meeting of the Japanese Society of Fisheries Science 1994

平成6年度日本水産学会秋季大会は去る10月1日から4日迄の4日間三重大学生物資源学部水産学コースの教官全員が協力して事に当たり、幸い好天にも恵まれて盛大に開催された。

全国各地の大学、国立研究所、地方自治体研究センター、民間研究機関から約1300名の国の内外の研究者が一堂に会し、水域の各種生物の漁獲、資源、生態、増殖、利用の各分野について基礎、応用両面にわたる幅広い学問領域で自然した討議が交わされた。その間、一般講演457題、ミニシンポジウム3題、シンポジウム2題をはじめ、魚類学会、魚肉タンパク集談会、魚類栄養・飼料研究会など様々な学会や研究集會が持たれた。

一般講演の中に特筆すべき成果はあるが、ここでは2題のシンポジウムから重要な話題を拾って紹介しよう。シンポジウム「有用海産魚介類の種苗生産技術の展開」は種苗生産をした魚介類を海に放流して資源の回復を図ることを目指した試験の総括であるが、栽培漁業を成り立たせるためには飛躍的な種苗生産を実現しなければ採算に合わないと言われる。種苗技術の改良によって魚類ではマダイ、ヒラメ、甲殻類ではクルマエビ、ヨシエビ、ガザミ、貝類ではホタテ、アワビ、アカガイが全国で1,000万尾(個)以上試験され、クルマエビ、ガザミ、アワビ、ウニは秋に生産と放流が実施されている。さらに、種苗から放流までの費用の低減の方策に触れ、種苗生産で健全な仔魚の試料になる動物プランクトンの増殖や原生動物や共生細菌が生産するビタミンB₁₂が有効に働くことから、微生物群集の検索から始めねばならぬ事が判った。また、初期試料に多用されるワムシの最適生育条件を探り、大量培養にはプランクトン(クロレラ)の大増殖と、酸素通気と、pH7の調整が鍵となり、ワムシの育種や遺伝的変異についても、詳細な研究例が披露された。一方、不足がちなワムシの変わりに仔稚魚用人工飼料開発の経緯が述べられ、リン脂質、DHA、ビタミンA添加の必要性が指摘され、今後は試料の消化率向上が課題であると結んでいる。既にホタテ貝では約32億個の種苗生産に成功し、採算に合っているので、種苗生産に関する飛躍的な発展が待たれる。

シンポジウム「水産増殖における生体防御機構研究の現状と将来」は獲る漁業から作る漁業への転換が言われて久しいが、栽培漁業は過密養殖による疾病が進んでい



シンポジウム会場
The scenery of symposium

The Autumn Meeting of the Japanese Society of Fisheries Science 1994 was held in Mie University on October 1-4, 1994, with approximately 1300 participants coming from all over the country, from Hokkaido to Okinawa. There were two symposia, three mini symposia and 457 general presentations reporting on the basic and applied research of fisheries science such as production, aquaculture, bioscience and utilization of marine and inland fishery.

The main purpose of this meeting was to provide a forum for exchanging new findings and their applica-



交歓会で委員長挨拶
Chairman's address at the reception

るので、最近盛んになりつつある養殖魚類の生体
防御機能を強めて抵抗性の強い魚を育てる研究の
現状を討議した。先ず、液性免疫について魚類表
皮粘液中に見出されるレクチンの作用で細菌を凝
集させ、皮膚リンパ球にある免疫グロブリンの存
在を報告した。また、貧食細胞の活性酵素産生に
よる殺菌作用についても報告した。次に、魚類の
補体系は哺乳類と同様に発達しており硬骨魚類は
侵入異物を処理する経路があることをみている。

さらに、コイ、ニジマス、サケなどの魚類に天
然キラー細胞の存在が見出され、寄生虫やウィル
スの感染に対して本細胞が生体防御に主要な働き
を果たし、その作用はMn,Zn含量に影響され、
コイでは低環境温度が本細胞の活性を左右するとい
う興味ある発表が注目された。次いで、細胞免疫
の中で代表的な反応である移植免疫活性は液性免
疫応答より個体発生の早い時期に発達するとして
いる。また、移植免疫に関与する細胞のアロ抗原
反応性細胞傷害性T細胞の存在をギンブナ、キ
ンギョの4倍体雑種を用いて感作ドナー細胞を
移植し、典型的な移植片対宿主反応で確かめた例
を挙げている。

さらに、各種の魚類で重要組織適合性抗原遺
伝子を単離し、その機能や構造についての研究が
開始された。したがって魚類には液性免疫機構
ばかりでなく、哺乳類に匹敵する細胞免疫機能
が存在すること

が明らかになり、細胞や分子レベルでこれらの事
象が捉えられようとしている。

魚類だけでなく原索動物のホヤや棘皮動物のウ
ニなどに液性免疫が存在し、系統発生的に脊椎動
物に近いので、細胞性免疫システムの原理がある
のではないかと研究が始まっている。この方面
での今後の成果が期待される。

以上、資源の高度利用に止まらず、各種水生
生物の生育環境保全と資源の持続的管理に配慮
した報告や講演会が多く発表され盛会であつた
が、会の運営や交歓会の盛り上がりなど参加者
の間で好評であった。



交歓会風景
The scenery at the reception

tion in any field of fisheries science, thus fastig
ing the progress and extension of fisheries science
technology. Therefore, presentations and information
exchanges were useful for not only fisheries science
but environmental conservation both in this country
and abroad.



交歓会場におけるギター・マンドリンクラブの演奏
The musical performance by guitar-mandolin club at the reception



筆者プロフィール

野田 宏行

生物資源学部教授 (農学博士)

1932年生

Profile

Hiroyuki NODA

Professor, Faculty of Bioresources

(Doctor of Agriculture)

Born in 1932

私は1992年9月から、外国人研究者としてお招きを受け、三重大学教育学部特殊教育研究室で研究しております。

私の専門は医学ですが、この2年間、松坂清俊教授の懇切丁寧なご指導のもとで、障害児心理・教育・病理の基礎理論を系統的に学習し、日本の各種心身障害児者の治療教育及び、福祉施策・施設の実態を調査研究していますが、その過程で、日本の障害児教育研究は、中国の現状に比較して、とても進んでいることを知りました。三重大学についても、多くのことを感じていますが、特に強く印象に残ったことを3点ほど書いてみます。

1. 充実した教授陣・日々研鑽の真摯な態度

私が現在席を置いている特殊教育研究室には、5名（教授3名、助教授2名）の先生が織られますが、それぞれ障害児の心理学、教育学、精神医学の分野で多くの業績をあげられ、今なお日々研鑽を進めておられ、学生にたいしても細やかな配慮と、丹念な指導をしておられます。

2. 多様な教育方法

ここではTV・VTRはじめ視聴覚機器を使った多様な教育方法を採用しています。学生は講義を受けるだけでなく、文献の研究、調査研究、レポート・論文の作成など、総合的能力の訓練を受けています。また、大学は外国人研究者のために、良好な学習研究環境を提供していただき、教育体験、参観、訪問、調査研究など、多様な形式を結合し、学習・研究は大学内から社会全体に広がり、大きな成果を得ています。

3. 優れた施設と心やさしい配慮

三重大学はコンピューター、映画、TV、スライドなどの進んだ設備と、豊富な蔵書を持つ図書館などによって、各方面の教育研究の需要を満たしています。また最近、大学の全てのエレベーターに、盲人・肢体不自由者の為の特殊装置を設置しましたし、大学構内の道路の盲人用案内路線と、車椅子に便利ように階段にはスロープを設け、障害児者のために、極めて行き届いた心やさしい配慮がされつつあります。

その他、研究室の温かくて楽しい雰囲気、先生と学生の親密な関係にも強い印象をうけました（学生のマナーにはいささか疑問を感じないでもありませんが）。

私はこのような学習研究環境のなかで、これまで四編の論文を、中国及び日本の学会誌に発表することができました。私は、ここで学んだことを中国の障害児者のために役立てたいと思います。

I came here from China in 1992, as a joint researcher to Prof. Matsusaka, in the Department of Special Education, Faculty of Education. During the two years, I experienced and investigated many things on educational, psychological and pathological



自閉症児についての討議
Discussion about Autistic Children

theories and practice for the handicapped children, as well as welfare and equipment in Japan. I could evaluate many kinds of developed teaching methods and tools, for instance, OHP, VTR and camera, computer and printer, etc. in Mie University. For this, I feel very grateful for the relationship between teachers and students of the department where I belonged to during these two years.



筆者プロフィール

周 平

江蘇省鎮江医学院 講師

1952年生

Profile

Zhon PING

Lecture, Medical School

Born in 1952

文化と教育の国際交流の役割

地域的・国際的な協力が自国の発展にはまず何よりも大切な時代になっています。とくに、大学や研究機関が教育文化の交流促進に貢献することは当然の責務でありましょう。云うまでもなく、教育や文化の相互交流がなくては、他国の政治や経済を理解し、さらに関係を深めることもできません。

しかしながら、交流と呼ばれるものには、破壊的な交流と建設的な交流の2つがあるように思われます。前者は、一方の文化を他方が打ち負かし、もし必要ならばそれを破壊しようとするものです。後者は、互いの文化を認め合い、人と人との相互理解を推し進めようとするものです。



他国の留学生との新年パーティー
A new year's party with foreign students

まず、他の文化について知ることが建設的な交流関係を築くことであり、やがて他の文化から自らが望むものを何か見出すことができるようになるでしょう。さらに、文化の交流は教育文化の交流促進、なかんずく大学では教官と学生との意見交換こそが他の文化を知る礎となっています。もちろん、書物の出版、語学教育、芸術の交流などのあらゆる方法を用いることも良い方法でしょう。

さて、日本はここ10年ほどで確固たる経済大国の地位を築きました。これに伴って、国際協力の必要性、とくに教育と文化の国際協力の重要性に気づき始めました。国際関係を促進するため、いくつかの教育文化事業が計画され、大学や研究機関も積極的に関与してきました。今日では、多くの外国人教官や留学生が日本の研究機関で学び、研究しております。日本の国立研究機関である三重大学は、この国際的な教育文化の国際交流にもっと積極的に寄与し、三重県における指導的な役割を担うことが求められています。

The Role of Cultural and Educational Exchange

We have already come in an era which regional and international cooperation plays the first role in development. Surely, the cooperation on educational and cultural issues has a fundamental importance in this regard that should be led by institutes and universities.

Educational and cultural exchange has a basic role in the international understanding and the expansion of political and economic relations. It can be flown in two forms of destructive cultural exchange and constructive one.

Japan which obtained a strong position in the economical world in recent decade, very soon was made aware of the necessity of international cooperation and particularly, of educational and cultural cooperation. It has planned some international educational and cultural programs for expansion of international relationships. Japanese institutes and universities have actively participated in those programs.

Mie university, as a national institute of Japan, should become more actively involved in this cooperation and is expected to play a leading role in the Mie prefecture.



筆者プロフィール
サディク・タベジャマート
大学院工学研究科修士課程
(イランより留学)
1965年生

Profile

Sadegh TABEJAMAAT

Senior Student of Master Course, Graduate School of Engineering (from Iran)

Born in 1965

第47回日本衛生動物学会大会

——第24回日本医学会総会分科会——

47TH ANNUAL MEETING OF JAPANESE SOCIETY OF MEDICAL ZOOLOGY

——Satellite Meeting of 24th Japanese Society of Medicine——

日時:

1995年4月2日~1995年4月3日

場所:

三重県教育文化会館

津市桜橋2-142

招待講演者:

日本、アメリカ

参加費: 7,000円

Date:

2th April 1995 ~ 3th April 1995

Venue:

Mieken Education and Culture Hall

2-142 Sakurabashi, Tsu, 514

Presentators:

Japanese, U.S.A.

Open to the Public:

Open to the Society members(fee: 7000yen)

代表 三重大学医学部教授 鎮西康雄

Yasuo CHINZEI, Coordinator

Professor, Faculty of Medicine, Mie University

問い合わせ先:

〒514 津市江戸橋2-174

三重大学医学部医動物学講座

Office:

2-174 Edobashi, Tsu, 514

Department of Medical Zoology, Faculty of Medicine, Mie University

電話: 0592-31-5013 Fax: 0592-31-5215

Phone: 0592-31-5013 Fax: 0592-31-5215

第2回インターネットによる国際会議

——バイオメディカルサイエンス——

THE INTERNET CONGRESS

——Biomedical Science——

日時:

1995年7月1日~1995年7月10日

場所:

三重大学医学部

津市江戸橋2-174

招待講演者:

アメリカ、カナダ、中国など約25ヶ国

参加費: 無料

Date:

1th July 1995 ~ 10th July 1995

Venue:

Department of Medicine, Mie University

2-174 Edobashi, Tsu, 514

Presentators:

About 25 Countries for example U.S.A., Canada, China etc.

Open to the Public: Free of Charge

代表 三重大学医学部長 矢谷隆一

Ruichi YATANI, Coordinator

Dean of Faculty of Medicine, Mie University

問い合わせ先:

〒514 津市江戸橋2-174

三重大学医学部附属病院医療情報部

Office:

2-174 Edobashi, Tsu, 514

Department of Medical Information, Mie University Hospital

電話: 0592-31-5195 Fax: 0592-31-5222

Phone: 0592-31-5195 Fax: 0592-31-5222

大学概要



- 所在地
〒514 三重県津市上浜町1515 ☎0592-32-1211
- 学部、学科〔入学定員〕
人文学部〔295〕
文化学科〔95〕：社会科学科〔200〕
教育学部〔330〕
小学校教員養成課程〔160〕：中学校教員養成課程〔70〕
養護学校教員養成課程〔20〕：幼稚園教員養成課程〔20〕
情報教育課程〔60〕
医学部〔100〕
医学科〔100〕
工学部〔410〕
機械工学科〔105〕：電気電子工学科〔110〕：分子素材工学科〔110〕
建築学科〔45〕：情報工学科〔40〕
生物資源学部〔306〕
生物資源学科〔306〕
計〔1,441〕
- 研究科〔入学定員〕
人文社会科学研究科〔10〕
教育学研究科〔37〕
医学研究科〔60〕
工学研究科〔74〕
生物資源学研究科博士前期課程〔88〕
博士後記課程〔12〕
計〔281〕
- 専攻科〔入学定員〕
特殊教育特別専攻科〔30〕
- 別科〔入学定員〕
農業別科〔30〕
- 医療技術短期大学部〔入学定員〕
看護学科〔80〕
- 職員の定員
1,818人
- 外国人留学生数（19ヶ国）
192人
- 総土地面積
5,472,691㎡

Outline of Mie University

- Location
1515 Kamihama-cho, Tsu-shi, Mie 514, Japan
- Faculties, Departments, Courses〔Capacity of Admission〕
Faculty of Humanities and Social Sciences〔295〕
Humanities〔95〕：Social Sciences〔200〕
Faculty of Education〔330〕
Training Course for Primary School Teachers〔160〕：Training Course for Junior High School Teachers〔70〕：Training Course for Handicapped Children's School Teachers〔20〕：Training Course for Kindergarten Teachers〔20〕：Course for Informative Education〔60〕
Faculty of medicine〔100〕
Medicine〔100〕
Faculty of Engineering〔410〕
Mechanical Engineering〔105〕：Electrical and Electronic Engineering〔110〕：Chemistry for Materials〔110〕：Architecture〔45〕：Information Engineering〔40〕
Faculty of Bioresources〔306〕
Bioresources〔306〕
Total〔1,441〕
- Research Divisions〔Capacity of Admission〕
Graduate School of Humanities and Social Sciences〔10〕
Graduate School of Education〔37〕
Graduate School of Medicine〔60〕
Graduate School of Engineering〔74〕
Graduate School of Bioresources Master's Program〔88〕
Doctor's Program〔12〕
Total〔281〕
- Graduate Course〔Capacity of Admission〕
Graduate Course of Special Education (Majoring in Education for the Mentally Retarded)〔30〕
- Special Course〔Capacity of Admission〕
Special Course of Agriculture〔30〕
- College of Medical Sciences〔Capacity of Admission〕
Nursing〔80〕
- Number of Faculty and Staff
1,818
- Number of Foreign Students (19 Countries)
192
- Total Land Area
5,472,691㎡ (= 1,352 acres)



平成6年12月

編集発行

三重大学広報委員会

委員長 藤原 和好

委員 久慈 利武 織田 揮準

” 嶋 照夫 玉置 維昭

” 上野 隆二